テリータン

Japn301s

**SERVICE LEARNING FINAL**

サービスラーニングの授業では、ステレオタイプや過小評価、第二外国語の習得、多文化について学ぶことの利点について勉強しました。わたしは、日本留学から帰ってきてからアメリカと日本の文化の違いについて気づき、比較することができるようになりました。このクラスはわたしの日本語の知識をテストするだけではなく、わたしの日本の文化を、日本文化についての知識がない多文化グループの子供達に教えるスキルについてもテストする機会になりました。また、このクラスのおかげでCPYに参加することができ、家庭レベルの低い子供達に日本について教えるチャンスを与えられました。

まず、最初の週はハイランドエレメンタリーという小学校に行きました。わたしたちのグループが担当する小学校です。最初、わたし達は学校のコーディネーターに会って、スケジュールと自分達の目的について話しました。色々なことに興味を持っている子供達はわたしたちの授業にわくわくしているようでした。しかし、スティーブンが「日本のことを知っていますか」と質問をすると、子供達は中国のことを答えました。多くの子供たちが日本のことを知らないことに気が付きました。二週目は、子供達に漢字の書き方やひらがなを紹介しました。子供達はこのトピックに興味がなかったのだと思います。わたし達の読み方や書き方の紹介には注目していないようでした。もう少し、子供達の気を引く教え方ができれば良かったと思いました。三週目は、屋外で行う日本の遊びについて紹介しました。この週は初めての外でのアクティビティを行いました。まず、わたし達はだるまさんが転んだやしっぽとり、鬼ごっこなどを教えてあげました。子供達は砂糖を食べ過ぎているからか、とても元気そうでした。たくさん動いたため、この週はとても大変でした。四週目は折り紙を教えに行きました。かぶとや蛙の作り方を教えてあげました。子供達はとても不器用でした。かぶとは新聞を使って大きいものを作ったので、かぶって遊ぶことができ、子供たちは楽しんでいる様子でした。四週目は紙皿を買って小学校に行き、昔話をしたり鬼のお面を作ったりしました。私達は桃太郎と浦島太郎の昔話を子供達に教えてあげました。子供達の表情が微妙で、楽しくないのだと思いました。しかし、鬼のお面を作ったら、ある子供は友達がいないからという理由で、鬼のお面で自分の新しい友達を作りました。そのあとは皆でお面を使ってゲームをしました。子供達は元気に走り回り、楽しんでいるように見えました。六週目は、わたしたちは何もしませんでした。スティーブンがテレビを持ってきてトトロを見たからです。映画に飽きてしまうことはなく、子供たちは最後まで楽しんでいるようでした。七週目は福笑いをやりました。まず、先週見たトトロの復習をしました。そしてその後、福笑いの説明をしてからゲームをやりました。ゲームをやっている時に先生が来ました。わたしはとてもびっくりしました。八週目はねんがじょうについて教えました。説明をしてから、カードを書きました。本物のねんがじょうを買うことができなかったので、アメリカのクリスマスカードと同じスタイルで書きました。子供達にはカードをあげたい人と、CPYに書いてもらいました。何人かは途中で飽きてしまったようでした。もう少し工夫が必要だったと思いました。十週目は最後のレッスンでした。さようならパーティーをして、皆でお菓子を食べました。子供たちは少しさみしそうでした。時間が過ぎるのは早いと思いました。低い家庭レベルの子供達に日本についてのことを教えるというのは初めての経験で、子供の異文化への知識や関心の少なさに驚かされました。そして、同時に教えることの難しさや日本の文化について新しく知ることも多く、自分も多くのことに気づかされ、学ぶことができました。わたしたちのレッスンを通して、少しでも多くの子供達が日本についての知識を得て、日本のことに興味を持ってくれたら良いと思っています。

個々の存在証明とは、どのように自分自身を定義するかです。それと比べて、社会的存在証明というのは、どのようにコミュニティーになじむかについてフォーカスしています。そして、文化的グループの存在証明というのはその文化が持っている何か、また、その文化の特有なものを指しています。

私たちの感じる幸福には、短期的な幸福と長期的な幸福のふたつが存在します。短期的な幸福は目先だけの幸せで、長くは続きません。幸せの後に不幸になってしまうこともしばしばあります。それに対して長期的な幸福は永続的な幸せだと言われ、今ある欲求を抑えたり、すぐに満足感は得られないものの、結果的には幸福になるのです。この二種類の幸せに大きく関係しているのが私たちの行動です。まず、自分が幸せになることがスタートポイントだとすると、短期的な幸福では己の幸福にばかり集中してしまい、利己的な行動が増えてしまいます。すると、長期的には不幸せになってしまう傾向があるのです。反対に、長期的な幸福の考えを持っている人は同じ「自分が幸せになること」を大切だとしていても、将来のことや周りのことを考え、意識的にも無意識的にも繫栄的な行動を取ることが多いと言われています。長期的な幸福を手に入れるためには短期的な幸福につながる自分の欲求を抑え、奉仕を行うことが大切なのです。

CPYの、危険な地域にいる子供を守るプログラムから、子供達がすでに過小評価をされていることがわかります。彼らは他の生徒と比べて家庭が幸せではないため、社会的な特権のコンセプトをすでに教え込まれています。多くの生徒がヒスパニックであるという事実と、どのように社会に馴染むのかというソーシャルスタディーから、子供達は社会的なアイデンティティーを確立しました。

社会的アイデンティティーはわたしたちが学んだ一般的な関心、またはバックグラウンドのアイデンティティーに関係しています。わたしたちは多くの文化が存在する環境で生活しているため、自分たちの周りに異なる文化のバックグラウンドを持つ人、ソーシャルクラスを持つ人がいることを忘れてしまっています。授業を取る前は社会学習をベースとした教育制度の違いについて考えたことはありませんでしたが、この授業を通して家庭レベルの低いの人達の教育レベルが違うことに気が付きました。

子供たちに会ったとき、わたしたちは自分たちの目標をすぐに決めること、子供達に日本の文化を教えることについての情熱を説明することができました。収入の少ない家庭、主にヒスパニックの家庭では、子供達はカンフーパンダが日本から来ていると思い込んでいて、授業に参加することを強く望んでいます。これは子供達が「アジアのものといえば日本からだろう」というステレオタイプを植えつけられている、という現状を表しています。そして、同時に子供達の理解力の弱さにも気が付きました。例えば、お盆についてのレクチャーの際には、メキシコでのハロウィンと比較をするまで彼らはお盆について理解ができていなかったようでした。

そして、コミュニティースキャンを行いました。これを行うことにより、その地域の人口統計や社会階級を知りことができ、授業をする際に子どもたちを不愉快にさせないことや学習理解レベルを考慮した授業の計画作りをすることができました。私たちが見た社会的文化の多様性としては、日本文化とは異なるヒスパニックや太平洋周辺などの多様なバックグラウンドを持つ子供たちがいるということです。コミュニティースキャンを通して、その地域にはそれほど多くの多様なグループはいないことに気がつきました。その地域の住民の大半が低所得者層のヒスパニックかアフリカンアメリカンでその周辺では多くのギャングの活動がおこっているように思われました。

私たちが子供達に質問をしたとき、彼らは静かに手を挙げて名前を呼ばれるのを待ちました。それと比べて、日本人の生徒は手は挙げず、自分の意見を言うことをためらいます。これは、先生たちが子供達のレベルを理解しなくてはいけないからです。違う文化を持つ人とコミュニケーションを取るために、CPYの生徒たちがいます。CPYを通して、わたしたちは文化の違いや、お互いのことについて学ぶことができます。

子供達と関わる際、わたしたちは悪い影響を与えないように注意しなければいけません。例えば、子供達にギャングのイメージを与えないために、赤い服を着ないように気をつけました。そして、「さん」を付けてお互いのことを呼びました。

CPYは社会の平等のためのシステムです。CPYの子供たちの住んでいる地域は一人で歩くことでさえ危ない場所です。それとは逆に、日本の学生は夜遅い時間にも一人で外を歩きます。これは日本が安全な場所だからです。CPYの子供たちはこのプログラムを通し、安全な場所で友達と一緒に過ごし、日本の文化を学ぶことができているのです。